

ことば・心・形

ポプラ社代表取締役社長

坂井 宏先

いつの頃からだろう

ことばが ぼくらの心に生まれ

ことばが ぼくらの心から動き出したのは。

ぼくらはことばというものを

あえて意識はしない。

けれどことばは、ぼくらの心の得体のしれない

力によって、時に

音として表われ、時に

心の中の呟きとなって動き出す。

そしてことばが文字というものに表出され、

ぼくらの意志となって伝達される

それらがすべて動き出すことによって

人間としての存在を意識し、

また他者からも一個の人間としての

存在となって認知される。

ことばと心は、いつも一緒である。

ぼくらの心が謙虚であれば

ことばは美しく軽やかな響きを

ともなつて相手に伝わるし

ぼくらのことばが不遜であれば

ことばは猛々しい雑音となって

不快なものとなる。

ことばはとても不思議なもので

その人の心のありようによって

千変万化する。

ではことばは心の持ちようによっていつも

正しく相手に伝わるかというと、そうでもない。

ことばはその人の話そうとする形、

いわばその人の姿勢によって

大きく変容する。

たとえば

ふんぞりかえって「おはよう」といえば

ずいぶん威圧的にもなるし、

逆に、相手の眼をみつめて

姿勢を正し、きもちをこめて

あいさつすれば、

そのことばは、ここちよい響きをもって

相手に沁み入っていく。

心が謙虚ならば、形・姿勢は関係ないと

思われがちだが、

形をきちんとする中で、ことばは、そして心の

ありようは、ずいぶん変わってくる。

ことばと心は、いつも一緒であるが、

ことばを発せんとするその形・姿勢が整つてこそ

ことばはことばとしての本来の使命を全うする。

わたしは長く、こどもの本の編集に携わっ

てきた。多くの作家と作品との出会いの中で、

ことばの持つ大きな力を教えていただいた。

作家のしほりだす一語一語には、まさに渾身

の力がこめられ、それが作品世界を美しく構

築していくのである。そのことばは、作品世

界の中で、まるで生きもののよう動き出し、

温かい体温を伴って、私たちの心の中に沁み

とおるようになってくるのだ。

ことばと心と、その形を、ことのほか大切

にしたのは坪田譲治の主宰する「びわの実学

校」であった。

「びわの実学校」といえば、松谷みよ子、今

西祐行、前川康男、大石真、竹崎有斐、寺村

輝夫、あまんきみこ、宮川ひろ、砂田弘と

いった戦後の日本の児童文学を支えた同人で

ある。

これらの同人を前に、坪田譲治は二枚童話

というものを毎回書かせ、それを正座させて

朗読させたという。二枚といえば、わずか八

百字の文字数である。この字数の中で、いや、

ことば数の中で、こどもたちにもわかるよう

に、やさしいことばで、しかも耳に聞いてお

話の展開とその作品のテーマがわかるように

まとめるのである。

それには、ことば一つ一つ、無駄な修飾語

やあまりにわかりにくい情緒的なことばは排

除される。

そしてさらにすごいのは、しほりこんだこ

とばで構築された作品を座を正して朗読する

のである。

これを毎回繰り返し返したと聞く。

こうしたことばそのものに対する熱い想い

と座を正して読者に語らんとする真摯な姿勢

によって、数々の名作は生まれたといって過

言ではあるまい。

最近、日本語の乱れとか、人と人との基本

的な会話が成立しないと聞くが、ことばを通

して、もう一度、我々日本人のことばと心と

形を、考え直す時にきているのではないか。



坂井 宏先（さかい ひろゆき）

1946年愛知県に生まれる。

ポプラ社代表取締役社長。

県立新城高校から早稲田大学を卒業。女子美術大学附属高等学校教諭となり、1年間の教師生活。1972年、高校教師などを経て、ポプラ社に入社。

編集者として、戦後最大のベストセラーといわれる『ズッコケ三人組』シリーズ（50巻・累計2100万部）をはじめ、『かいけつゾロリ』シリーズ（40巻・累計1400万部）など、人気シリーズを数多く手掛ける。

編集部長、専務取締役を経て、1998年、代表取締役社長に就任。